

身近な福祉用具 安全に使う

電動車いすや介護ベッドなどの福祉用具は、日常生活を支えてくれる心強い味方ですが、事故も起きています。身体機能が低下し、介助が必要になった高齢者が使うことから、少しの操作ミスが重大な結果につながりやすいためです。製造会社や国が、安全な利用のための取り組みを進めています。

(板垣茂良)

「道路の右側に寄りすぎて走行すると、側溝があるので危ないですよ。50までは空けましょう」

静岡県藤枝市で4月中旬、シニアカー(ハンドル付き電動車いす)を運転する望月喬彦さん(88)に、福祉用具専門相談員の大原清人さん(47)が声をかけた。望月さんは、いつもこの道を通って、自宅から2キロ離れたスーパーに向かう。シニアカーを運転している人は、道路交通法で歩行者と同じ扱いのため、道路の右端を通らなければ

ならない。スピードも最高時速6キロと、大人の早歩きほどに制限されている。

大原さんは、シニアカーや電動車いすの製造・販売、貸与を行う「セリオ」(浜松市)の社員だ。自社の製品をレンタルしている高齢者宅を月に1度訪れ、タイヤやブレーキの状態を確認する。その際、安全な運転に向けたアドバイスもしている。

望月さんが、介護保険制度を使って、同社のシニアカーに乗り始めたのは昨年5月。運転免許の返納がきっかけだった。

福祉用具は、介護保険を利用すると、原則1割の自己負担でレンタルや購入ができる。対象の製品は、約1万6000点に上る。特徴をよく理解して選ぼう。

例えば、足腰の筋力が弱った高齢者が移動の際に利用する歩行器の場合、車輪が付いた折り畳み式で軽いものは持ち運びやすい。電車やバスで出かけるという人に便利だ。

生活スタイル 相談員に伝えて

歩行器には、座面が付いたタイプもある。東京都豊島区の介護事業所「ケアフレンド」の福祉用具専門相談員、齊藤一夫さん(66)は「自宅から離れたスーパーに歩いて行く際に、腰掛けて一休みできる」と話す。

シャワーチェアは、足もとがぬれた浴室で滑って転倒するのを防ぐのに役立つ。背もたれや肘掛けが付いていると、立ち上がる際に足腰にかかる負担を減らしてくれる。様々な色の製品が販売されているが、例えば、浴室の床面が白っぽい場合、オレンジや緑の製品を選べると、視力が衰えた人も一目で分かり、安全だ。

齊藤さんは「自身の健康状態や生活スタイルを専門相談員にしっかり伝えることが、適切な福祉用具の選択につながる」と語る。

メーカー 利用者に操作・運転指導



シニアカーに乗る望月さん(右)に注意点を伝える大原さん(静岡県藤枝市で)

福祉用具で起きやすい事故の例

- 電動車いすシニアカー**
 - 道路脇の側溝に気づかずに走行し、タイヤが側溝にはまる
 - 狭い踏切内で対向車を避けようとしてハンドル操作を誤り、脱輪
- 歩行器**
 - 歩行器の脚が敷居にぶつかってバランスを崩し、転倒
- 介護ベッド**
 - 寝返りをした際、柵を乗り越え、転落しそうになった

(テクノエイド協会の事例集などを基に作成)

死亡・けがの事故も

厚生労働省によると、シニアカーを含めた福祉用具の利用者は2023年度に約380万人と、10年間で1.6倍に増えた。利用者の増加に伴い、死亡事故やけがを負う事故もたびたび起きている。徳島県では昨年7月、シニアカーを運転していた90歳の男性が、川に転落して亡くなった。静

福祉用具は、反射神経や判断能力が衰えた人も利用している。ただ、介護保険の運営基準では、利用者にとり安全な指導を行うのは、福祉用具の事業者が委ねられている。

セリオでは、初めて機器を扱う高齢者に対して、実際の主な行き先まで同行する「安全運転指導」を行っている。大原さんは「少し遠回りになっても、信号機のない横断歩道や踏切をなるべく避けて目的地に向かうことが、危険な目に遭わないために大切だ」と強調する。

死亡・けがの事故も

昨年10月からは、アプリを使って、クイズ形式でシニアカーの交通ルールを利用者に確認してもらう試みも始めた。

岡山県では昨年11月、介護ベッドを利用していた80歳代が、ベッドのフレームに挟まって死亡した。こうした状況を踏まえ、厚労省は昨秋、消費者庁や自治体がそれぞれ収集していた福祉用具に関する事故情報を、一元管理する仕組みを構築した。高齢者や介護職員の安全な利用につなげ、メーカーの製品開発にも活用してもらう狙いがある。

死亡・けがの事故も

また、同協会では、福祉用具の事故の事例集もホームページで公開している。実際に起きた事故を踏まえた事例について、車いす、歩行器など機器の種類や浴室、踏切といった場所での検索できる。

五島清国・企画部長(57)は「安全な利用のため、事故の起きやすい場面を多く知っておいてほしい」と話している。